

ARTEFACT 20-21
[無題]
SUPPLEMENT

CULTURAL CITY
NARRATIVE OF A
都市のカルチュラル・ナラティブ



コレクティヴ・メモリー

地域の文化と記憶を読み解くワークショップ

ラーニング・ワークショップ「コレクティヴ・メモリー」

参加学生によるレポート

報告：

山口舞桜（慶應義塾大学 文学部 民族学考古学専攻）

石井諒太（慶應義塾大学 経済学部 経済学科）

公的に編纂された記録だけではなく、個々人のナラティヴが積み重なって生まれる記憶の地層こそが、街の記憶の形成には重要なのではないか——「コレクティヴ・メモリー」は、このような視座から「街の記憶」を考えるワークショップだ。

「コミュニティ・アーカイヴ」をテーマに、地域の住民、在勤者、在学者が集って学び、ディスカッションした今年を取組を、参加学生にレポートしてもらった。



各回のサマリー

「コレクティブ・メモリー」は「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト（以下、カルナラ）がホストする全5回のラーニング・ワークショップだ。

「都市に息づく文化を多様な視点から物語り、つなぐ」ことを目的とするカルナラは、各個人のナラティブを通じて文化に接することによって、テンプレート的な、真っ当な説明だけでない、単一の言葉に収束しない文化の側面たちが見えるのでは？ということを考えているという。「コレクティブ・メモリー」は、外部の方をお呼びして、〈個人のナラティブ〉と〈共有の文化／歴史〉がどのように関わるのかについて、参加者と一緒に学びを得ようじゃないかという企画である。（山口）

第1回

オリエンテーション

日時：2021年12月10日（金）19:00-20:00

場所：芝コミュニティはうす

参加者：13名

講師：渡部葉子、本間友、森山緑

初回のオリエンテーションでは、この企画の位置づけと、参加者も主催者もフラットにディスカッションしながら学んでいこうという姿勢、これからお話を聞く講師の方々について紹介があった。「声が小さい人の記憶も残しておけないか」という渡部葉子さんの言葉がキーワードに感じられた。その後、参加者が自己紹介をした。カルナラに参加したことのある人、初参加の人、学生、港区に長く住んでいる人、都内に働くために来ていたので学びも得てみたいと思った人、コンサルティング会社から働き先を慶應に変えた人などなど。ぜひともじっくり話してみたいという人ばかりで、これからの4回がとても楽しみになった。（山口）

第2回

コミュニティとアーカイブ

日時：2021年12月17日（金）19:00-20:30

場所：慶應義塾大学（三田）東館 G-1ab

参加者：17名

講師：佐藤知久（京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授）、渡部葉子、本間友、森山緑

第一回目のワークショップにお招きしたのは、京都市立芸術大学芸術資源研究センターの文化人類学者佐藤知久さん。文化人類学が専門の佐藤さんは、まさにアーカイブのプロである。そんな佐藤さんの現在の関心はコミュニティ・アーカイブ。市民自らが、自分の暮らす地域や、関係するコミュニティにおいて生じた出来事を記録し、それをアーカイブとして継承しようとする活動である。

佐藤さんは、かつて、仲間が HIV に感染したことがきっかけに HIV 患者の研究に乗り出したという。HIV 患者への差別と戦うべくアーティストの仲間とともに活動し、研究者として HIV の正しい知識づくりに取り組んだ

が、HIV への差別は変わらなかった。

しばらく意気消沈していたなかで、東日本大震災後、佐藤さんと親交のある甲斐賢治さんが仙台で取り組んでいた「3がつ11にちをわすれないためにセンター」という活動に出会った。それは、佐藤さんのアーカイヴについての認識を揺さぶるものだった。アーカイヴといえば、一般的には公的機関が一定の形式のもとで公式の文書として残すものや、研究者が後の検証に備えるために科学的に記述されるものなどが思い当たる。

しかし、仙台にあったのは、いわゆる「普通の人」が映像などの記録を独自に残している姿であった。専門家や報道機関のプロによる震災の記録と、実際に現地で暮らしている人たちの震災の経験には齟齬があり、被災地の方々の感じるもやもやをきっかけにリアルな発信が生み出されたという。このような経験から、佐藤さんはガイドブック『コミュニティ・アーカイヴをつくろう!』を編集し、コミュニティ・アーカイヴの方法論を日本ではじめてまとめあげたのだ。

ディスカッションでは、集団の記憶とはなにかについて話が及んだ。集団の記憶は、地域に根付いた個人のなかにある記憶と、書物や学問のなかで語られる歴史との間にある。単に個人の記憶の蓄積ではなさそうだ。言うべきことのフレームが集団で形成され、その範囲が集団の記憶となるのではないか。小野和子の『あいたくてききたくて旅にでる』や山田稔『こないだ』を例に紹介されたのは、個別具体的で特定の集団にしか分からない話や経験の記述でありながら、それでも時代や場所を代表している語りだ。経験していなくても、思い出し方や精神には共感ができるのだ。

「3がつ11にちをわすれないためにセン

ター」では記録を無編集でそのまま放り出すことはしていない。どのように考えたのか、どのように聞いたのか、聞いた自分はどのように受け取ったのかが表現されている。ただ記録を定着させたり、できごとそのものを伝えるのではなく、思考を通して語るのである。各々が持つ記憶にあるできごとは、一つの事例に過ぎないが、一度きりのはっきりとした思考の過程を通すことで共有物になる。受け手はいわば三角測量を行う。できごと、思考を通したナラティブ、そして自分の三点を通して捉えるのだ。(石井)

第3回

麻布未来写真館プロジェクト

日時：2022年1月14日(金) 19:00-20:30

場所：慶應義塾大学(三田)東館 G-lab

参加者：15名

講師：麻布未来写真館プロジェクト(近藤敏康、大橋俊平、板橋勝之)、渡部葉子、本間友、森山緑

港区に、街の記憶を記録している活動がある。港区の五つの支所の一つである麻布地区総合支所で独自に実施されている「麻布未来写真館」だ。今回は麻布未来写真館の座長である近藤敏康さん、事業の運営にコンサルタントとして参加している大橋俊平さん、麻布支所の担当者である板橋勝之さんにお話しを伺った。

麻布未来写真館の活動の中心は、写真とキャプションからなるパネルの製作と展示である。パネルは、タイトル、複数枚の写真、テキスト、地図などで構成されている。タイトルは様々な。天体観測から昆虫、オリンピック、新型コロナ、交差点まであり、時代も様々



である。展示するパネルの一部は、富士ファイルの協力によって、100年耐える印刷技術が使用され、記憶を伝えるための装置としてパネルが永く機能するようになっている。

麻布未来写真館のおもしろさ、参加のしやすさには、いくつかポイントがある。たとえば、情報量の多い写真を選ぶこと、デザインフォーマットを統一すること、展示の機会を多く確保することなどだ。

複数の写真を組みあわせてキャプションをつけることで、撮影された時点での記憶や現在との繋がりが見えてくる。写真とキャプションが繋がることで、ナラティブがみえる。写真のコンテキストを伝えるために、特定のオブジェクトを大写しにしたような写真ではなく、背景や周りの状況などの情報量の多い写真を用いるようにしている。確かにパネルの写真は必ずしも上手とは言えないが、上手い下手という基準に限られた街の記録ではなく、各々が街で感じたことや注目したことが伝わるような写真が理想なのだ。

それぞれに異なる街への視点をまとめ上げるための工夫が、フォーマットの統一だ。パネルの内容は基本、参加者が自由に制作するが、ただ、自由度が高すぎるとは構成に迷ってしまう。そこでパネルにフォーマットを

設定し、制作にあたってはひとつのテーマと写真・キャプションだけを考えればよいようにした。

これらのパネルを、港区役所や有栖川公園、麻布地区の学校など、多くの場所で展示する。展示の機会を豊富に設けることで、活動が意図せず区民の目に触れる機会も増え、そうして興味を持った人に街の記憶が伝わっていく。また、展示を頻繁に行うことで、波のない活動を作ることができる。活動に波が無ければ、波に乗れない参加者が発生することもない。

麻布未来写真館の活動はまさに学園祭であり、前に述べたような工夫を凝らしながら、楽しく皆が関われるかたちで自由に制作をしている。麻布地区での仕事や暮らしに忙しい地域住民が、自身のペースとノウハウで企画を作りあげる満足感と緩さ。これが地域に根付いたアーカイブ活動の大事な要素であるのだろう。(石井)

第4回

街の記録／記憶を展示する

日時：2022年1月24日(月) 19:00-20:30

場所：慶應義塾大学(三田) 東館 G-lab

参加者：19名

講師：大内曜(東京都美術館)、渡部葉子、
本間友、森山緑

三回目のお話しは、東京都美術館で学芸員をされている大内曜さんに、武蔵野市立吉祥寺美術館にて作られた記録集『はな子のいる風景 イメージを(ひっ)くりかえす』の制作過程を中心に、市井の人たち(パブリックな、ローカルな人たち)の想いに紐づく記録／記憶のかたち化についてお聞きした。

大内さんは元から、残すことや、素朴な「残したい、伝えたい」という思いに関心があったという。祖母が繰り返し話す戦時の記憶を聞きながら、話すことは残したい・伝えたいという思いの表れなのではと考えていたそう。その後、残すことを考え続けていくという思いで、武蔵野市立吉祥寺美術館の学芸員になった。

吉祥寺美術館で担当した展示「カンパセーション_ピース：かたちを(た)もたない記録」にもまさにそういった関心が現れている。誰しもの記憶を刺激し、在りし日の風景を誘い出そうとする、ぼやかされた家族像を描く小西紀行。8ミリフィルムに残された映像を人々が共に観ることで記憶が刺激され、よみがえる一その場そのものに注目し、アーカイヴと捉えるチーム「AHA!」。両者と共に作った本展は、記憶の断片たちが来場者の記憶をもゆらりゆらりと引き出す場になっていただろう。照明を限りなく落とした鑑賞空間や、

本展示のための8ミリフィルム収集時に立ち現れた〈会話〉をまとめた一冊『あとを追う』を読むために設置された椅子・机・小さなライトの存在から感じられた、その場を記憶の流出／入を促す間とするための深い配慮が非常に印象的だった。

『はな子のいる風景 イメージを(ひっ)くりかえす』のきっかけは、「カンパセーション_ピース」展に際し、8ミリフィルムを持ち主と共に観る中で、はな子の話題が何度も出てきたことにある。1949年にタイからやってきてから井の頭自然文化園のスターとして長年愛されてきたはな子。知らない人たち同士が、はな子という一頭の象を通して結びつくことを実感した。はな子の写真を集めれば市井の人々の記憶が集約され、またそこから各人の記憶が刺激され、広がっていくのではという発想が湧き上がり、武蔵野市における新たなアーカイヴ作りの試みが始まった。

しかし、写真集めの準備をしている最中に、はな子が亡くなってしまった。69歳だった。何年も前から亡くなくてもおかしくないと言われていたが、プロジェクトを開始してからのタイミングで亡くなってしまった。それでもはな子の写真を集め始めることにした。ずると思いのこもったたくさんの写真が美術館に届けられた。直接写真を持って来館し、思い出を語る方もいたという。しかし悩ましい問題もあった。当初の目的は、はな子を中心において〈はな子と関わった人々の記憶〉を浮かび上がらせることだった。しかしこのままでは、〈はな子〉の写真集という性格が強くなりすぎてしまう。写真提供者と話す機会もあった大内さんはプロジェクトの本来の目的と市民の望みに板挟みになったという。

しかし、編集の松本篤さん(AHA!)と、デザイナーの尾中俊介さん(Caramari. Inc)

と話す中で、本記録集のコアとなるのは「はな子を愛する人とはな子を全く知らない人の双方に届くような本を作ること」であると考え、本の最後に『イメージを(ひっ)くりかえす』という冊子を入れることにした。この冊子には、撮影者と被写体にまつわるエピソード、撮影された当時の印象に残っているエピソード、あなたがこれまでに失った大切なもの一つとその経験、という三つの項目が記載されている。これらの項目を入れることによって、この本をはな子の写真集のように見てきた人も、一緒に写っていた人に目が行くようになり、イメージがひっくり返される。大内さんは、市民の気持ちに寄った自分と、遠隔地から参加した二人が共に作業を進めたからこそ、上手いバランスに落ち着いたのではないかと振り返った。

第5回

大学と街の関わり：大学のある風景

日時：2022年1月28日(金) 19:00-20:30

場所：慶應義塾大学(三田) 東館 G-lab

参加者：15名

講師：都倉武之(慶應義塾福澤研究センター准教授)、渡部葉子、本間友、森山緑

最終回のゲストは、慶應義塾福澤研究センターの都倉武之さん。福澤諭吉と慶應義塾の歴史を伝える福沢諭吉記念慶應義塾史展示館での展示活動を担っている。

お話しの冒頭では、慶應義塾の学風を伝える興味深い資料が共有された。学風と地域は相互的な影響を持つ。地理的な側面而言えば、三田山上の丘の上という立地は、周囲と隔絶されたキャンパス空間を作り上げた。しかし、慶應義塾の学生はそんな隔絶

された狭いキャンパスから積極的に出ていく気風をもっているという。他大学では、寮の文化にも象徴的に現れているように、大学の中に閉じこもって強固な共同体を築く例もあるが、慶應義塾の学生には、外の世界と積極的に関わり、実社会を知ろうとする姿勢があった。地に足をつけて実学を学べとの福澤の教えの通り、勉強をしながら三田で風呂屋を経営する塾生もいた。

大学を巡る語りの記録も紹介された。大学に隣接していた多田質屋の娘さんが語る、昔の恋の記憶に出てくる競争部や水泳部の塾生。塾生行きつけの山崎理髪店や茶の子稲荷に残る記録。三田地域の人々の記憶のなかには、大学に向かうものがたくさん存在する。過去の一瞬を切り取った個々のナラティブは、大学を中心とした記録ではないにもかかわらず、当事者意識や没入感を伴う大学の記憶として立ち現れてくる。

地域にある個人的なナラティブは、慶應義塾の記憶の一面を明らかにする。個々のナラティブは断片に過ぎないが、その断片性やズレを意識しながら、大学という一つの場所の上にナラティブを展開することによって、記憶のレイヤーや複層的になり、豊かになっていく。

ARTEFACT 20-21 無題
SUPPLEMENT

[編集]

「都市のカルチュラル・ナラティブ」
プロジェクト

[発行]

慶應義塾大学アート・センター
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45
03-5427-1621
<http://art-c.keio.ac.jp/~artefact>
2022年3月21日

本誌は令和2年度港区文化プログラム連携事業「都市のカルチュラル・ナラティブ：地域文化資源リレーションシップ——地域文化資源をつなぐ講座」の一環として制作されました。



ARTEFACT 20-21
[無題]
SUPPLEMENT

CULTURAL CITY
NARRATIVE OF A
都市のカルチュラル・ナラティブ

